

ルソーとヴォルテール（一）

永田，英一

<https://doi.org/10.15017/2332857>

出版情報：文藝研究. 57, pp.97-110, 1958-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



ルソーとヴォルテール(二)

永田 英一

ソー三十三歳、ヴォルテール五十一歳で、両者の社会的地位は比較にならなかつた。――

ルソー¹⁾とヴォルテール²⁾との關係は、周知のように、本質的に相異つた二つの精神、性格、また人生觀、世界觀の対立抗争であつて、歴史的意味においては、ゲーテの有名な言葉を永遠に正當づけるであらう。「ヴォルテールとともに一つの世界が終り、ルソーとともに一つの世界が始まる。」けれどもこの言葉は要するに一種の抽象的定義であつて、いま両者の關係をできるだけ近くから、現実の人間のドラマとしてみるならば、われわれはその烈しさ、深刻さ、その特異性に驚かされる。そしてここでもまたジャン・ジャックの祖国「ジュネーヴ」が大きな役割を果しているのを見逃すことができない。

- 1) Rousseau (Jean-Jacques, 1712-1778)
- 2) Voltaire (François-Marie Arouet, dit, 1694-1778)

*

ルソーとヴォルテールの交渉は一七四五年にはじまる。時にル

ルソーは一七四四年十月、ヴェニス駐在フランス大使の秘書をやめてパリへ歸つてきた。そして「心の中に社会制度にたいする忿懣の種」をいだきながらも、また貴族高官の社会に出入し、やがて徴税請負人ラ・ポプリニエールの知遇をえた。ラ・ポプリニエールは、当時、その夫人とともに文学芸術の保護者をもつてみづから任じていたが、ジャン・ジャックにも好意をよせ、歌劇「粹な詩神」¹⁾を自邸で上演させた。またリシユリユー公も、そのころ周知の理由からラ・ポプリニエール夫人のもとに通つていたが、この若い音楽家に興味をおぼえ、かつ大いに好意を示した。そして四五年十月、ヴェルサイユで上演するためにヴォルテール作「ナヴァールの王女」²⁾をとりあげた際、これを「ラミールの祭」³⁾と改題して、その改作をルソーに依頼した。原作はラモールの作曲による三幕の喜歌劇であつたが、これを一幕に短縮して宮廷の慰めに供するために歌詞と曲譜を調整せよというのであつた。

1) *les Muses galantes.*

2) *Princesse de Navarre.*

3) *Fêtes de Ramire.*

ルソーはこの殊遇に感激した。また「二人の大家に自分も加えられた」ことに感奮して、早速仕事にかかり、二カ月間苦心してこれを完了した。そしてヴォルテールに諒解をもとめるために、きわめて丁寧な手紙を書き送った。

「拝啓、わたしは十五年前からあなたの御注目と御高配に値するように努力しております。と申しますのは、あなたは若干の才能を見出される若い詩人たちにそうした恩恵をあたえておられます。けれども、あるオペラの作曲をしましたために、いつの間にか、わたしは音楽家になりました。リシュリュー公が御作「ナヴァールの王女」の幕間の余興の場面をわたしに委ねられたのも、この資格においてであります。公はさらに歌詞においても、あなたの新しい主題に適合させるために必要な変更を加えるように要求されました。わたしは謹んでお断り申しましたが、公は固執されました。わたしは譲歩いたしました。これがわたしの身分にふさわしい態度であります。パロ氏がこの改作をあなたにお届けすることを引受けてくれました。わたしは修正をできるだけ少い字句に限ることに努めました。これがわたしの加える唯一の価値であります。足下よ、何卒御検討下さるように、あるい

はむしろその場にふさわしい言葉を置替えて下さるようお願いい申しあげます。

足下よ、また叙唱についても、何卒上演の前に御批判下され、わたしが美と真実から、すなわちあなたの御意見から離れているような箇所を御指摘下さるようお願いい申しあげます。このささやかな試みの結果がたとえわたしにとつてどのようなものでありましようとも、あなたとお近づきになり、かつあなたに賞讃と深い敬意を表する名誉をえられますならば、わたしには永久に光栄であります。」(一七四五年十二月十一日、パリにて)

ヴォルテールからも早速返信があつた。ヴォルテールとしては見も知らぬ青年から、いわば事後承諾をもとめてきたのであつたが、この際リシュリュー公の手前を考えてか、文面は決して礼を失するものではなかつた。

「足下よ、あなたは今日までつねに分離していた二つの才能をあわせ持つておられます。それだけでもすでに、わたしにとつてはあなたを尊敬し、かつあなたを愛するように努めるべき二つの立派な理由です。わたしはあなたのために、あなたがこれら二つの才能をあまりにもそれにふさわしくない仕事に用いておられるのを残念に思います。数カ月前に、リシュリュー公はわたしに幾つかの場面のつまらぬ草稿を早急につくるように厳命しました。無趣味で不完全なその場面を、元来それには適していない幕間の余興に合わせなければ

ならぬというのです。わたしはもつとも厳正に従いました。

非常な拙速でやりましたが、そしてこのあわれな下書をリシェリユー公に送りましたが、これでは役に立つまい、あるいは訂正しようと考えていたのです。それが幸いにもあなたのお手の中にあります。あなたはそれをどうなさろうと絶対に自由です。わたしはもうすつかり目を放しました。こういう急作りのほんの下書にはどうしても誤りを見落すものですが、あなたがそれをすべて訂正して下さったことを、また穴を埋め、完全に補って下さったことを疑いません。……

あなたとバロ氏に一切をお委せします。そして近いうちにあなたに感謝の意を表する名譽をもつつもりです。」(一七四五年十二月十五日)

しかしながら改作の結果は失敗であつた。舞台稽古はオペラ座で行われたが、原作者は姿をみせず、ラ・ボプリニエール夫人は「葬送曲」だと非難した。リシェリユー公はラモーと相談してさらに修正しなければならぬといった。賞讃をのみ期待していたジャン・ジャックは「死ぬ思いで」逃げかえり、心痛のあまり六週間寝込んでしまった。そして「ラミールの祭」は一七四五年十二月二十二日ヴェルサイユで上演されたが、番付にはヴォルテールの名しか載っていないかつた。ラモーはルソーと名をつらねる位なら削られた方がましだと考えたのだ。

* ラ・ボプリニエール夫人は「ラモーにたいする友情」から、その競争者の出るのを好まなかつたし、また自分があ

るジュネーヴ人に結婚を反対されたことから、すべてのジュネーヴ人に「仮借なき憎悪」をいだいていた。

けれどもルソーとしては、この時はじめて当代最高の詩人と音楽家の仕事に参加して、「自分のモデルたちの傍にいた」ことをせめて慰めとしたであらう。というのは、先の手紙にもあつたように「十五年前から」ルソーがヴォルテールを念頭においていたのは事実であつた。「告白録」の中で、かれはシャンペリー時代にヴァラン夫人の家で、ヴォルテールに心酔したことを述べている。

「ヴォルテールの書くものは何ものも見逃さなかつた。わたしはそれを読んで興味をおぼえ、そこから、優雅に書くことを学んで、そしてわたしが心を奪われていたこの作家の美しい色彩を模倣したいと願つた。暫くしてかれの「哲学書簡」*が出た。これはたしかにかれの最良の作ではないが、わたしを勉学の方へもつとも引きつけたものであつた。そしてこの芽生えはじめた趣味はこの時からもう消えなかつた。」

(巻五)

* *Lettres philosophiques* (1734)

*

その後もルソーは一向にうだつが上らなかつた。生活は苦渋にみちていた。下宿の女中テレーズ・ルヴァースルと同居して「マ

ンの後継者」をえたが、その両親や飢えた一族は非常な重荷になった。かれはつまりらぬ劇を書いたり、デュパン夫人やその義子フランク・イーユの秘書をつとめた。そしてこのころから急にディドロやグリムやダランベールと親しくなり、エピソード夫人やウドト夫人とも知合いになったが、所詮この山出しのジュネーヴ人は不器用でヤボな「熊」であつた。ルソーは胸中に、幼時ブリュタルクから植えつけられたヒロイズムの発酵を感じながらも、一七四九年の、あの開眼の瞬間まで、こうした不安と焦躁の中に低迷していた。

他方ヴォルテールは名声と光栄の絶頂にあつた。ダルジャンソン侯やポンパドゥール夫人の庇護の下に宮廷の信用を回復し、修史官、侍従、アカデミー会員になつたばかりか、外国の君主たちからもあつち友情と尊敬をうけていた。

*

けれども、またここに両者の間に交渉をもたせる一つの事件が起つた。――

一七五〇年一月のある日、ヴォルテールはフランス座で自作の劇の上演をみていた。すると突然平土間から悪質なヤジがとんで大騒ぎになつた。怒つたヴォルテールは、機敷から半身をのり出して叫んだ。

――君は誰か。

――ルソーだ。

――どのルソーだ、プチ・ルソーか。

ある婦人に留められて、問答は中止されたが、観客はドツと笑つた。

このルソーはジャン・ジャックではなかつた。ブイヨン（ベルギー）の「ジュールナル・アンシクロペディック」の編集者であつた。けれどもヴォルテールはこれを「プチ・ルソー」つまりジュネーヴのルソーと思つた。そして「ラミールの祭」の改作の折のことを想い起して、この忘恩を非難した。

ジャン・ジャックはこのことを聞いて、ヴォルテールへ釈明の手紙を書いた。けれどもかれはすでに「開眼の瞬間」を経験していただに、おのづから、毅然たるものを失わなかつた。

「拝啓、かつて一人のルソー（ジャン・バティスト）が、みづからあなたの風下に立つことをおそれて、あなたの敵であることを宣言しました。いま一人のルソーは、才能によつてこのルソーに近づくことができないので、その不敵なやり方を真似ようとしています。わたしはかれらと同じ名前をもつております。しかし前者の才能も後者のうぬばれももっておりませんし、ましてあなたにたいするかれらの不正をなしている柄ではありません。わたしは人に知られずに生きることには大いに賛成しますが、名誉を傷つけられることは承知できません。そしてもしわたしが、すべての文学者があなたに払うべき尊敬を欠いたとすれば、わたしは名誉を傷つけられたと思うでしょう。みづからその資格ある人々はすべてあなた

たを尊敬しております。

わたしはこの問題については詳しく述べたくありません。またあなたにたいしてさえ、決して面と向つて人を賞めないという、自分に課した掟に背きたくありません。けれども、足下よ、憚りながら申しあげますが、あなたは正しい人間を誤解しておられます。そしてその人間が「ラミールの祭」についてあなたからうけた好意と儀礼にたいして忘恩と尊大とで報いることができると思つておられます。わたしはあの時あなたからいただいた手紙を決して忘れてはおりません。わたしはあの手紙によつてあなたが、つまらぬ中傷にもかかわらず、真に若い才能の保護者であることを確信するにいたりました。あなたがわたしに友情を約束して下さつたのは、わたしもその道を試みていた人々（文学者）のためです。かれらの運命は不幸でした。わたしもそれを覚悟すべきであつたでしょう。ろくに口をきく術も知らぬ孤独者、臆病で失望落胆した男は、とてもあなたの前に現われることはできません。それ故わたしは、あなたのお目の前に出る勇氣もなく、あなたに尊敬と感謝を表するための何かの好機のくるのを待つていたのです。

あの日から、わたしは文学や名声をえたいという氣紛れを断念しました。そしてあなたのように、天才によつて名声を博することに絶望しながらも、卑俗な人々のように、術策によつて成功することを潔しとしかつたのであります。けれどもわたしはあなたの著作にたいする賞讃は決してやめないでしょう。あなたは友情とあらゆる美德を、それを知りそれ

を愛する人らしく描かれました。わたしは心中に羨望のささやきを聞きましたが、そのさわめきを無視しました。そして確信をもつて、こう申しました。「わたしの魂を高揚させ、わたしの勇氣を燃え立たせるこれらの著作は、決して美德に無関心な人のものではない」と。

あなたはまた共和主義者というものを誤解しておられます。と申しますのは、わたしはあなたから共和主義者として知られていたのです。わたしは自由を讃仰します。わたしは支配と奴隷をひとしく憎悪し、何人をも威圧したくありません。こうした感情は傲慢とは一致しないものです。傲慢は奴隷に、あるいはもつと卑しい人間に、また大家を嫉視する小作家にずつとふさわしいものなのです。

それ故、足下よ、わたしはあなたに断言します。ジュネーヴのルソーは決して、あなたがかれのものとした言葉を吐かなかつたばかりか、そのような言葉を口にすることもできないのです。わたしはあなたの知遇をえる名誉に値するとは思つておりません。しかしもしその幸福がえられるとすれば、それはただあなたの評価にふさわしい点からであつてほしいと思います。」（一七五〇年一月三十日、パリにて）

そしてルソーは最後に「ジュネーヴ市民・ジャン・ジャック・ルソー」と署名した。この肩書を用いたのはこれが初めてである。ルソーはまだジュネーヴ共和国の市民権を回復していないかつたけれど、この時あえてこれを用いたのは、単に区別のためではなかつたであらう。ジャン・ジャックは自由国家の市民であつ

て、王国の廷臣、臣民、つまり「奴隸」ではないというのだ。

この手紙をよんでヴォルテールは、これを鼓吹した感情を十分に察したのであろう。けれどもかれは例の調子で軽くあしらった。

「足下よ、あなたはあなたの誠実さによつてルソーの名の名誉を回復しています。問題の男は決してジュネーヴの市民ではなく、人の話では、文壇の泥沼の市民だそうです。この男はあなたの持ちえない不正をもつていますが、あなたほどの価値をもつていないようです。」

この短信には差出人の署名もなかつた。ルソーは見事に肩すかしを食つて、眼前に二人をへだてる大きな溝をみたであらう。：ヴォルテールはその後まもなくフレデリック二世の招きをうけてポツダムへ出発する。そしてジャン・ジャックはようやく栄光の座に近づきつつあつた。

* この事件のあと数週間して、ルソーとヴォルテールはグラフィニー夫人の家で面接したといわれる。もし事實ならば、これがかれらの生涯における唯一の出會である。けれどもモーグラは一度も相會したことはないとの説をとつて
s. n. (Cf. G. Maugras, *Voltaire et Rousseau*, P. 1)

*

一七四九年のルソーの「開眼の瞬間」については、先にもちよ

つとふれたが、これはいうまでもなく同年十月ヴァンサンヌの獄塔ヘイドロを見舞いにゆく途中、ディジョン・アカデミーの懸賞課題をみた瞬間である。『学問芸術の復興は道徳の醇化に寄与したかどうか。』ルソーはこの瞬間「急激な靈感」にうたれ、「別世界をみ、別人となつた。」かれは決然と「否」と答えた。こうして書きあげた論文「学問芸術論¹⁾」は翌年八月当選し、十一月公刊されて、ルソーは一躍有名になつた。そして五三年にはまた同じアカデミーのために「人間不平等起源論²⁾」を書く。その間「村の卜者」はフォンテーヌブローで国王の前で上演され、非常な成功をおさめた。

- 1) *Discours sur les Sciences et les Arts* (1750)
- 2) *Discours sur les origines de l'inégalité parmi les hommes* (1755)
- 3) *le Devin du village* (1752)

時代はすでに十八世紀の後半に入つていた。ディドロとダランベールは「百科全書」を出版していた。モンテスキューはやがて他界し、ヴォルテールの世界は後退しつつあつた。ルソーの世界がそれにとつて代らうとしていたのだ。

*

さてルソーとヴォルテールの関係は、一七五五年二月ヴォルテールがジュネーヴの近郊に居を定めるにいたつて、一段とわるい方向に進展する。――

ヴォルテールは、一七五三年三月フレデリック二世に追い出され、諸所を転々した後「難破でぬれた衣服を乾かすために」このカルヴァンの町へ逃れてきた。そして例の巧妙なやり方で共和国の領内に居住する許可をとり、ジュネーヴに真近い景勝の地サン・ジャンに立派な邸館を構えて、これを「デリス」*les Délices*と名づけたのであつた。

他方ルソーは「不平等論」を書きあげると、これをジュネーヴ共和国に献じて、一七五四年六月うまれ故郷へ旅をした。そしてジュネーヴで朝野をあげての大歓迎をうけると、たちまち愛国熱と共和熱にかされて、かれは父祖の宗教に再改宗するとともに、「市民権から除外されているのを恥ぢて」同年八月一日正式にこれを回復した。ジャン・ジャック・ルソーはいまや名実ともに「ジュネーヴ市民」になつたのだ*。

* ルソーは一七二八年カトリック教に改宗したのであつた。

ルソーは同年十月パリへ帰つてきた。けれども翌年春にはまたジュネーヴへ引返して、そこに永住するつもりであつた。

この時からルソーはフランスの思想風俗、特にパリの喧騒にたいして極端な嫌惡を示し出した。そしてジュネーヴで知合つた友人たちとときりに手紙を交換して、時には自国の代理大使を気取つていた。また王族と奴隸の國にあつて、ひとり共和国の市民であ

り、自由の使徒であるとの意識をさらに強めたように思われる。

けれども、その後のジュネーヴの動勢は必ずしも好ましいものではなかつた。ルソーの政治思想や再改宗の真意について疑惑をいだくものもあり、反ルソーの気配は意外に濃厚のようであつた。その上、あのヴォルテールがジュネーヴの周辺を動き出したのだ。

ルソーは一七五四年十二月、ジュネーヴの物理数学の教授ジャラベールにあててこういう手紙を書いている。

「ヴォルテール氏がドニ夫人（ヴォルテールの姪）とブランジャンの館へ出発したと聞きましたが、それではジュネーヴに居住する計画をあきらめたのだと思われまゝ。かれはジュネーヴで若干の困難に出会つたのでしょうか。多くの天分とさらに多くの才智と、またその世紀にもつともすばらしい文筆をもちながら、この男はつねに自分の不幸と、時には他人の不幸をつくるに適した心しかもつていません。ドニ夫人について、わたしはかつて少しかの女の社交界に出入しましたが、これは才能もあり、なかなか分別もある女性でした。けれども人の話では、才女ぶるマニヤから小うるさい女になつていくそうです。そして伯父との交際では、とてもこの欠点を治すことはできないでしょう。かれらの滞在はわたしたちの町には名譽でしかありません。願わくば、かれらがわが文学者たちの間にみちている平和を攪乱しないように。」（一七五四年十二月十六日、パリにて）

ルソーは絶えずヴォルテールの動きに注目していたのであった。翌年一月にも、かれはジュネーヴ教会の有力者ヴェルヌにあってこう書いている。

「わたしはすでにヴォルテール氏がジュネーヴへいつて、そしてそこからブランジャンへ向つたことを知っていました。あなたはこの世紀第一の作家に会う機会を逸しられるなら、美德にささげられる犠牲をすべて御存じにならないわけです。なぜなら、かれは人間社会のもつともすばらしい才人であるばかりか、もつとも愛すべき人です。それ故にだかれの才智とだけ交際することができれば、かれの膝下で生涯をすごさねばならないでしょう。わたしとしては、人が何とおうと、嫉妬の激しさを知っていますが、それでもかれの性格についてわたしちにしきりに与えられる印象には譲歩することができません。かれは美德の魅力と友情の楽しさを描きましたが、この二つのものを感じるに適した心をもつていなければ、決してあのように描けるものではありません。わたしはかれがわたしの祖国へきた今日ほど強く、わたしの好意的な考えを正当づけてもらいたいと望んだことはありません。願わくば、かれがわたしの同国人を愛し、教え、そしてわが文学者たちをかれが見出した時と同様によく和合一致させておいてくれるように。」（一七五五年一月二日、パリにて）

そしてルソーはオランダで印刷していた「不平等論」の校正中に、ヴォルテールがデリスに腰をおつけたことを知つたのである。しかもそのヴォルテールはジュネーヴの市民たち、特に上層階級から持てはやされ、ルソーの友人とも親しく交わつていうのであった。

*

しかしながら考えてみれば、いま急に「この男」と干戈を交える理由は何もない。ルソーは一七五五年八月「不平等論」が出ると、ヴォルテールに敬意を表してその一部を贈呈した。周知のように、この論文は「学問芸術論」にもまして反文明のパラドクスである。

ヴォルテールからは長い感謝の手紙がきた。

「足下よ、人類に反対するあなたの新しい著作をうけとりました。あなたは人間の真実をのべてかれらを喜ばせるでしょうが、かれらを匡正することはしないでしよう。われわれの無智と無力は人間社会に多くの慰安を期待していますが、その社会の災禍をかくも力強い色彩で描くことはできません。かつてわれわれを獣類にしようとしてかくも多くの才智が用いられたことはありません。あなたの著作をよんでみると、四足で歩きたくなります。けれども、わたしはその習性を失つてからもう六十年以上になりますので、残念ながらそれを取戻すことは不可能と感じます。そこでこの自然な歩き方

は、あなたやわたしよりもずっとそれにふさわしいものたちに委せます。またわたしは船に乗つてカナダの未開人をみにゆくこともできません。というのは、第一にわたしを打ちひしんでいる病気がヨーロッパ最大の医師（トロンシャン）の側にわたしを引留めますし、ミズリーの人々の間では同じ救護を見出せそうもないからです。第二に戦争がかの国にももたらされて、われら諸国民の実例が未開人をもわれわれと同じ位に邪惡なものにしてしまつたからです。わたしは静かな場所です。平和な未開人であることに満足します。そしてその場所には、あなたが当然おられるべきお国のそばにわたしが選んだものです。

わたしはあなたとともに文学や学問が時には多くの禍を引起したことを認めます。タツソーの敵どもは、かれの生涯を不幸の連続としました。ガリレイの敵どもは、地球の運動を知つたために、六十歳のかれを獄屋に呻吟させました。そして、もつとも恥づべきことは、かれらがかれに取消を強制したことです。あなたの友人たちが「百科辞書」をはじめると、あえてかれらの敵にまわつた人々は、かれらを理神論者、無神論者、さてはジャンセニスト呼ばわりしました。

もしこのわたしもあえて、労苦の報酬として迫害しかもたなかつた人々の数に入るとすれば、「ユディップ王」（一七八年）の悲劇を世に出した日から、わたしを破滅させるために狂奔した人々をおみせしましょう。わたしにたいして印刷された滑稽な中傷文書の数々、極刑から救つてやつたのにその恩を誹毀冊子で報いる元ジエズイット（デフ・オンテューヌ）、

わたしの著作「ルイ十四世時代」に、もつとも卑劣な無智からもつとも破廉恥な妄言をならべた註解を附して印刷させる男、またわたしの名で「世界史」なるものの数章を本屋に売りつける男、そしてこの誤謬や間違つた日付やでたらめの事実や名前の、不細工な綴織を印刷するほど貪欲な本屋、さてはこのポロ作品の出版をわたしのものとするほど卑怯で意地わるな連中。

またわたしは古代には全然みられなかつたあの新しい人間種族の腐敗した社会をお目にかけましょう。かれらは人夫とか、従僕とかの、かたぎの職業につくことができず、しかも不幸にして読み書きを知っているので、文学のプロローカーとなり、われわれの著述を食ひものにし、原稿を盗み、改変してこれを売りつけるのです。……

わたしはまた忘恩、詐欺、掠奪を描いてみせましょう。これらは四十歳の時からアルプスの麓まで、わたしの墓のそばまで、わたしを追及してきます。けれどもわたしはこれらすべての苦難から何を結論するでしょう。自分は歎くべきではない、ポーブ、デカルト、ベール、カモンイシ、その他百人もの人々が同じ不正を、もつと重大な不正を蒙つたのだ、こうした運命は文学の愛にあまりに魅せられた殆んどすべての人々の宿命なのだ、ということです。

足下よ、実際、これらは社会もほとんど気づかない小さな特殊な不幸なのです。幾つかのモンズズメ蜂が幾つかの蜜蜂の蜜をかすめたからといって、それが人類に何の關係がありません。文学者はこうした小さないざこざに大騒ぎをする

のです。その余の人々はこれを知らぬか、笑うかです。

人間生活の上にふりかかるあらゆる苦難の中で、これらはもつとも恐ろしくないものです。文学やさやかかな名声にくつついた棘は、古来地上に汎濫した他の災禍に比べれば、花にすぎません。キケロもヴァロも、ルクレチウスもウェリギリウスも、ホラチウスも、追放迫害には参与しませんでした。マリウスは無智だったのです。野蛮なスラ、放逸なアントニウス、愚かなレピドゥスは、プラトンやソフォクレスをちつとも読まなかつたのです。そしてあの懦弱な暴君、卑怯にもアウグストゥスと緋名されたオクタヴィウス・セピアスについていえば、これが憎むべき殺人者であつたのは、ただ文学者の社会を失つた時代だけです。

足下よ、ペトラルカやボッカチオはイタリアの擾乱を引きさなかつたでしょう。マロの戯言はサン・バルテルミーの虐殺を引きさなかつたでしょう。また「ル・シッド」の悲劇はフロンドの乱の原因とはならなかつたでしょう。重大犯罪はほとんど有名な文盲者によつてのみ行われたのです。この世を永遠に涙の谷とするのは、人間の飽くなき貪欲と御しがたい傲慢なのです。……文学は魂を養い、匡し、慰めます。足下よ、文学はあなたが文学に反対して書いておられる時にも、あなたに役立っているのです。あなたは名譽にたいして怒るアキレウスや、またすばらしい想像力をもつて想像に反対して書くマルブランシュ師のようです。

シャピュイ氏からあなたの健康が大へんわるいと聞きました。故国の空氣で健康を回復し、自由を楽しみ、わたしと一

緒にわが牝牛たちの乳を飲み、わが草々を食みに来られなければなりません。」（一七五五年八月三十日）

見られる通り、この手紙にはヴォルテール一流の皮肉な調子でルソーの説の反論がのべられている。特に「あなたが当然おられるべきお國のそば」とか、末尾の招待の文句はルソーの胸を刺したであろう。けれどもヴォルテールほどの大家が、こういう長文の手紙で挨拶をよこしたことは、少からず喜びであつたに違いない。ルソーは早速ながい返事を書いた。

「拝復、あらゆる点で感謝しなければならないのは、このわたしです。わたしはつまらぬ空想の走り書をあなたに贈呈しましたが、その時あなたにふさわしい贈物をするとは決して思いませんでした。わたしは一つの義務を果し、あたかもわたしたち（ジュネーヴ人）の首長としてわたしたちがあなたに捧げるべき敬意を表するつもりだったのであります。もともと、わたしはあなたがわたしの祖國に与えられる名譽に心を動かされて、わが同市民たちと感謝の念とともにしております。そしてかれらがあなたの授けられる教えを利用するならば、ますます感謝の念は増大するだろうと思います。あなたがお選びになつた住家を美化して下さい。人々をあなたの教訓にふさわしいものにして下さい。そして、美德と自由をかくも立派に描かれるあなたは、あなたの著述におけると同様に、わたしたちの城郭の中でもそれらを愛することを教えて下さい。あなたに近づくものはすべてあなたから光采

の道をまなぶに違いありません。

御覽のように、わたしはわれわれがわれわれの獸性に帰ることを望んでいるではありません。といつても、自分としてはそれをちつとも失つていないことをはなはだ遺憾に思つております。足下よ、こうした復帰は同時に重大かつ有害な奇蹟でしようから、それをなすものは神のみであり、それを欲するものは悪魔のみでありましよう。されば四つ這いにならないで下さい。世にあなたほどのことに成功しないものは誰もないでしよう。あなたはあまりにも立派にわれわれを二本足で立たせられるので、いまさら御自身の二本足でお立ちになることを止めるわけにゆきません。

わたしは文学における著名な人々につきまとうあらゆる不幸を認めます。また人類に結びついたあらゆる害悪をも承認しますが、これはわれわれのつまらぬ智識とは無関係のようには思われます。人間はみづからの上にかくも多くの悲惨の泉を切りひらいたので、たまたまそのどれかが方向をかえても、人間はやはり水浸しなのです。その上、物事の進行には、凡俗にはみえない隠された連繋があるものですが、これは省察をおこたらぬ賢者の目をのがれることはできません。

ローマの災禍とローマ人の犯罪を引起したのは、テレンチウスでもキケロでも、ウェルギリウスでもセネカでもタキツスでもありません。学者でも詩人でもありません。：文学芸術の趣味は国民が増大させる下等な悪徳から生れるものです。そして人間のあらゆる進歩が果して種族に有害であれば、精神と智識の進歩は、われわれの傲慢を助長し、われわれの迷

妄を増加させて、やがてわれわれの禍に拍車をかけます。しかし悪を生んだ原因そのものが、悪の増大を阻止するのに必要となるような時がやつてきます。つまり、刃をとり除くと負傷者が死ぬおそれがあるので、刃をそのまま傷口にはつておかねばならないのと同様です。

わたしについて申しますと、もしわたしの最初の天職（時計工）に従つていたなら、おそらくもつと幸福だったでしょう。しかしながら、今もし文学が廃止されたとすれば、わたしに残されている唯一の楽しみを失うことになるでしょう。わたしがあらゆる不幸から慰められるのは、文学のふところにおいてであります。わたしが友情の喜びを味わい、死をおそれることなく生を楽しむことを学んでいるのは、文学を修める人々の間においてであります。わたしはささやかな自分の存在をこれに負つています。さらにあなたの知遇をえる名誉もそのおかげです。けれどもわれわれの問題においては利害を、そしてわれわれの著述においては真理を顧慮しましょう。たとえ世界を啓発し、その盲目な住民を導くために哲学者、歴史家、学識者が必要であるとしても、また賢者メンノンがわたしに真実を語つたとしても、わたしは賢者の群はどれほどおろかなものは何も知りません。……

社会の混乱の第一の源泉を求めてみましょう。そうすれば、人類のあらゆる禍が無智よりもずっと多く誤謬からきていることがわかるでしょう。またわれわれがちつとも知らないことの方が、知つていてと信じていることよりもずっとずっとわれわれを害しないことがわかるでしょう。ところで誤

謬から誤謬へかけ回る方法として、すべてを知りたいという狂気ほど確かなものがありましようか。もし人々が地球は回転しないということを知ろうと欲しなかつたならば、地球は回転するといったために、ガリレイを罰することは決してしなかつたでしよう。もし哲学者のみがその資格を要求したならば、「百科全書」は決して迫害者をもたなかつたでしよう。もし小人輩が栄光を望まないならば、あなたは静かにあなたの栄光を楽しまれるでしよう。少くともあなたはあなたにふさわしい敵手をもみたるでしよう。……

あなたの御招待には感謝します。そしてもしこの冬に異常がなくて、春に祖国へいつて住める状態であれば、わたしはかの地であなたの御好意にあづかりましよう。けれどもわたしはあなたの牝牛の乳よりもあなたの泉の水が飲みたいと思います。そしてあなたの畑の草については、獣類の飼料でないロートス(故国を忘れる草)とか、人間が獣になるのを妨げるモリー(魔法の草)のほかには何もないのではないかと惧れています。」(一七五五年九月十日、パリにて)

このあとすぐルソーはヴォルテールから、先のルソー宛書簡を發表したいという短信をうけとつた。ヴォルテールはパリで流布されている自分の偽作を否認するためにこれを用いる意向であったが、「人間の不正について語る際、それをよく知っている人に話しかけるに越したことはない」とつけ加えている。ルソーは快く承諾した。

そしてヴォルテールの手紙は、ルソーの返信とともに、一七五

五年十一月の「メルキュール・ド・フランス」に發表された。ヴォルテールのものには次のような一節が追加されていた。

「もし誰かが文学について不平をいわねばならないとすれば、それはわたしなのです。なぜなら、あらゆる時、あらゆる場所において、文学はわたしを迫害することに役立つたからです。けれども文学がどんなに濫用されようと、文学を愛さなければなりません。ちやうど多くの悪人どもが社会の愉しみを汚濁しても、社会を愛さなければならぬように。どんな不正を蒙ろうと、祖国を愛さなければならぬように。またしばしば信仰を汚す迷信にもかかわらず、至高の存在を愛し、かつこれに奉仕しなければならないように。」

しかしルソーの手紙は、無断で掲載されたばかりか、散々に手を加えられ、「全くのたわ言」になつていた。ルソーは烈しく抗議し、訂正を要求した。けれども、いまやフランス一流の新聞にヴォルテールと肩をならべて公表されたのである。あたかも「ふさわしい敵手」として相譲らぬ両雄のように。

*

この期における両者の交渉には、少くとも表面上の礼儀は保たれている。しかし最初の論文にせよ、この「不平等論」にせよ、ルソーの思想と行動の原理が、いかにヴォルテールのそれと異なるものであるか、また正反対のものであるかを証明した。両者はい

まこそ明確にこのことを認識したであらう*。

* 後年ロシア女帝エカテリーナの購入したヴォルテールの蔵書の中に、ルソーが贈った「不平等論」の一本が発見された。これにはヴォルテールの書込みがあつた。『滑稽な……哀れむべき……偽りの……悪小説……お前こそ狂人だ!……ディオゲネスの猿よ……』などという言葉が記されていた。特に「考える人間は墮落した動物」というルソーの文句には太い線が引かれていた。また財産と市民社會の根本をついた有名な第二部冒頭の文章については、こう記されていた。『何だ、苗を植え、種子を蒔き、圃いをしたものが、その勞苦に權利をもたないというのか。……何だ!不正な泥棒が人類の恩人だなんて!これはごろつきの哲學だ。』(Cf. J. Guéhenno, *Jean-Jacques, Roman et Vérité*, P. 115-6)

*

ところでジュネーヴの情勢はどうであつたであらうか。

ルソーが「不平等論」をジュネーヴ共和国に捧げたことは先にもふれたが、その時かれは壮重な献呈文を書いて、祖国の政治、宗教、風俗について最大限の敬意と賞讃を披歴したのであつた。けれどもこの論文の内容は、すでに貴族化していた政府当局に気に入るはずはなかつた。ルソーは主席委員シューエから挨拶状をうけとつたが、それは「丁重だけれど、冷淡な」文面であつた。

そして「もつとも純粹な愛国心に口授されたこの献呈文も、ただ評議會(政府)の中に敵をつくり、市民の間に嫉視者をつくつた」にすぎなかつた。ルソーは同胞の間に爆発的な熱誠を期待していただけに、この結果ははなはだ面白くなかつた。そしてそれにつけても、氣になるのはヴォルテールの存在であつた。

そうこうするうち、ルソーはエピネー夫人から好意ある申し出をうけた。もしフランスに留まるならば、モンモランシーの森の近くのシュヴレットの別館「エルミタージュ」を提供しようというのだ。夫人はわざわざこの別館を改修して、ルソーに示していた。

「わたしの熊さん、さあ、これがあなたの隠家ですよ。これをお選びになつたのはあなたですし、これを差上げるのは友情です。どうか、これでわたしから離れるなんて罪な考はよつたんですよ。」

ルソーは感激の涙で夫人の手をぬらし、ついにジュネーヴへ帰ることを断念した。そして一七五六年四月九日パリから「エルミタージュ」へ引越したのであつた。

けれどもこのルソーの決心には、いま一つ大きな理由があつた。それは「告白録」の中に述べられている。

「もう一つわたしの決心を大いに助けたものは、ヴォルテール

ルがジュネーヴのそばに居を定めたことであつた。わたしはこう考えた。あの男はかの地で変革を起すだろう。わたしは郷国へいつても、パリからわたしを追い出した調子、態度、風習を見出すだろう。そしてわたしは絶えず闘わねばならぬいだろうし、自分の行動においては鼻持ちならぬ術学者か、卑怯で不埒な市民となるよりはかに途がないだろうと。わたしの今度の著作についてヴォルテールがよこした手紙は、わたしの返事の中にこの不安をはのめかさせるに十分であつた。そしてその結果はそれを裏づけた。わたしはこの時からもうジュネーヴは駄目だと思つた。そしてその通りであつた。おそろくわたしとしては、もしその能力を身に感じたならば、正面から嵐にぶつかつてゆくべきだつただろう。しかし、この一人ばつちで、臆病で口不調法なわたしは、傲慢で豪勢で、大官連の威光に支えられ、すばらしく口達者で、もう婦人連や青年たちの偶像である男にたいして何ができたろう。」(巻八)

いうならば、ルソーはヴォルテールに「祖国ジュネーヴ」を横領されたのであつた。しかしルソーとしても、フランスにおける自分と同様に、ヴォルテールがかの地で一箇の異邦人であり、また一種の亡命者であることを想うべきであつたであらう。ジャン・ジャックはあまりにも情念に目がくらんでいたであらうか。

* ヴォルテールはこの頃から「スイス人・ヴォルテール」
le Suisse Voltaire とも稱していた。

それはとにかく、ここに至つてルソーとヴォルテールの関係は、もはや後退をゆるさぬ段階に入つたといえる。思想的立場の相異対立に加えて、心理的に一段と深刻さをおびてきたのだ。

二つの精神、二つの体系、要するに二つの世界の間に、いわば歴史的な闘争がはじまつたのだ。そしてそれは文字通り不倶戴天の敵対であり、同時に地上に永遠の戦いであるともいえよう。なぜならこの戦いは、ジャン・ゲーノもいうように「今日もなお終つていず、われわれもすべてこれに参加している」*からである。

(未完)

* 前掲書、一一六ページ。

○ 主要参考書——

- 1) J.-J. Rousseau, *les Confessions*.
- 2) T. Dufour, *Correspondance générale de J.-J. Rousseau*.
- 3) M. G. Strecheisen-Moutou, *J.-J. Rousseau, ses Amis et ses Ennemis*.
- 4) R. Naves, *Lettres choisies de Voltaire* (Garnier)

なお本稿では便宜上個有名詞の原語表記や註解を省いたが、次の機会に記したい。